

うしお

第 1 号

34731

目次

巻頭言	西田 稔	1
アコヤガイの水槽内人工飼育 について	養殖部 瀬戸口 勇	3
ブリ仔採捕試験報告 (第一報)	調査部 九万田一己	10
奄美短信	大島分場	24
東海サバ漁況(6月分)	漁業部	25
各部日記	編集部	26
分場日記	大島分場	27
編集後記	編集部	

鹿児島県水産試験場

近年恒例となつた県の定期異動が6月早々に発令されると言うウワサが何となく職員一般の人心をざわめかし始めたのは、年度当初の頃からだつたが、いろいろの都合から延び延びになつたとみえて、いよいよ発令されたのは7月10日の部課長級に始まり全員の係長級を経て去る30日に一般職員の分が終り一段落となつた。

一般の気分が何となく落着かぬ期間が4ヶ月に及んだわけで、これはある程度マイナスだから異動事務にとりかかつたら1ヶ月位で片づけてもらいたいし、特に研究職々員は誰でも代れるものではないから、なるべくは定期異動からは除いてもらいたいものである。

本県の場合異動の度毎に管理者も一般職員もそれぞれの立場で頭をなやます大きな原因の一つは離島をかかえていることである。殊に太島郡をなると本島内でさえ鹿児島島から東京までと同じ時間と旅費がかかる。しかも強風注意報が出ると欠航する船便である。この注意報がまた東京あたりに比べると格段に多い。おそらく雨の予報回数位あるのではなからうか。順調に行つても7月に1回位しかない上に列車の2等3等と比べて設備待遇ともにそれぞれ問題にならぬ位にオソマツで、おまけにピッチング、ローリングが充分に頂戴できる仕掛である。行き着いた町が衣食住、教育、衛生、娯楽その他生活並に文化の面で鹿児島市とは比較にならぬとしても、本土各地の県職員が駐在する町村と比べて、赴任した職員家族にとっては全くありがたくない所である。

“今度の異動では内地(?)へ帰れるのではないか”と大島在勤中の職員の多くの者は期待する。“どうか大島在勤にならぬ様に”と祈るのは内地在勤中の職員の大部分おそらくは全部に近いと推定される。(地元の方々よ怒らないで下さい。これは人情だから。東京に育つた人の多くは鹿児島市内の事務所勤務する場合を全く同じ気持ちで迎える様です)

しかし大島に引つづいて在勤する人も、新に赴任する人も、一度良く考え直していただきたいのは、上記の様な状態に在るからこそ多額且高率の国庫補助を得て大島振興事業が実施されていることである。多くの人があまり苦にせず赴任する様な島であれば、そんな措置がとられるはずがないのである。水産試験場も大島分場を持つている。今回の発令で分場関係だけで8名が動いた。中には4年近くも同地に在つて前記の様な状態の町に住み、しかも昨年末の大火で公私共被災全焼した事件も経ながら、良く仕事に取り組んで成果を挙げられたことは感謝に耐えず、真に御苦労様でした。

一方新に赴任される方々や、引つづいて在勤中の方々は今後いろいろ苦勞の多いことであろうが、一応自分本位の考えから離れて環境の本質を良く見極めてそれにマッチした心構えと生活態度をお願い致したい。大島郡が鹿児島県管内であり現在の情況が続く限り誰かがその持場に就かねばならぬことは自明のことである。自分本位の希望をどうしても貫きたければ、それが可能な職場、離島に出先が無い様な職場を他に求めて転向すべきであろう。

良く学び良く遊ぶことは小学生だけが必要な心構えでは無いと思う。現地に則した仕事を自ら発見努力すると共に余暇は世間から是任される範囲で現地でできる娯楽や趣味に没頭し充分なリクリエーションで活動の源泉を枯らさない工夫をしていただきたいものである。忘れてはならぬことは趣味娯楽にも初めはある程度の努力の継続が必要なことである。ねて待つていたり、何か面白いことはないかと他から与えられることを期待しているだけでは、グループを必要とするものはもちろんのこと、独りで楽しむものでも趣味娯楽に発展することはない。都市から田舎に行くほど、創意と努力が必要であろう。要するに小人閑居して不善を為すという状態に陥らぬ様に願いたいものである。うしお誌の巻頭言としてはいささか的はずれの感があつたが、人がすべての根源である以上、今後本分場を通じて事業上影響するところが決して少なくないと信ずるので、あえて一言した次第である。

緒 言

浅海貝類の人工飼育についてはわが国内だけでも小林、結城のアコヤガイ(1) 今井、畑中のマガキ(2) 本県水試大島分場のマベ(3) 等多くの報文があり、マベを除いては大型のコンクリートタンクを使用して稚貝採苗に成功しているが、アコヤガイは近年天然採苗の発達で人工飼育による種苗生産は全く実施されていない。

これに対し本県産のクロチヨウガイでは年間5万個の母貝生産を示しているが、最近生産量は減退し、又価格の騰貴を呼んでいる状態で、人工飼育による積極的な母貝増産の必要性に迫られている。

私は真珠養殖に関する全般的事項について研修すべく国立真珠研究所に約1ヶ年間滞在する機会を得、その間、多徳島臨海実験室においてガラス水槽を用い、アコヤガイの人工飼育実験を行つたのでその概要を報告する。

これは小ガラス水槽4ヶを使つた小実験的なものであり、又クロチヨウガイ人工飼育の場合の予備的な実験としたので内容は極めて簡単なものとなつた。報告にあたり御指導、御教示を賜つた国立真珠研究所高山所長、太田研究課長、町井技官、*Chlamydomonas* sp. を分譲下された三重県大辻井禎氏に感謝の意を表する。

材料及方法

供試材料は多徳島試験地で養殖中の3~4年貝で生殖葉の
充滿しているものを弁別し、完熟個体♀362から卵、精子
を切り出し $\frac{1}{500}$ NのNH₄OH海水中(PH8.8)で受精
せしめた。飼育水槽は15、10、5ℓ容のガラス水槽で、
Blastula-stage となつて表層に浮上し始めたものを飼
育水1000 当り1ヶ体の割合で順次セット、D型仔虫に達
してからChlamydomonas sp. を飼育水100 当り
5000ヶになるよう計数投餌し、又仔虫の發育につれて給
餌量も増量してSpatには15000~18000ヶの割合
とした。飼育水は天然のろ過海水を用い5~7日毎に $\frac{1}{3}$ ~
 $\frac{1}{2}$ を換水し毎日1回静かにかくはんするほか止水状態とし
室温の低下につれてサーモスタットを施設し保温した。浮游
仔貝がfull grown-stage となり、附着時期に達してか
らコレクターとしてクモリガラス片を施設して附着せしめ、
更に自然海に放養するようガラス面に附着したSpatを小石
に附着がせし、その小石を網目2mmの小網籠に收容して多徳
島試験海面に垂下した。

結果と考察

8月18日人工受精せしめ4細胞期に達してから計数した
結果約92%の受精率を示し以後順調な發育をなし、30日
間にわたつて飼育を続けた。
受精後2時間40分でBlastula-stage となつて廻轉運
動を始めて浮上し、3時間30分でTrochophore-stage
となり、1.5時間でD-shaped larva に達するものと
みられ、20時間後には殆んどD-shaped Larva とな
つた。D-shaped larva 以後の後期發生は6日後から
Umboが隆起し始め、14日後には完全なUmbo-stage と
なり23日後にeye spot があらわれてFull grown-
stage に達し、23日後から附着するようになった。

(Tab. 1~2, Fig 1~2 参照)

Tab. 1 浮游Larvaの發育

時 日	S. L.	S. H.	備 考
受精後20時間	72 μ	60 μ	Early D-shaped
" 2 日	76	65	D-shaped
" 3 日	79	67	
" 5 日	84	73	Early Umbo stage
" 8 日	98	87	Umbo-stage
" 10 日	114	107	
" 12 日	137	128	
" 15 日	148	139	
" 20 日	165	156	
" 25 日	209	195	Full-grown stage

(10ヶ体の平均値)

Tab. 2 spatの成長

日	S. L.	S. H.	日	S. L.	S. H.
原殻の 最大 大き さ 後 附 着 後 2 日	216 μ	206 μ	附着後 1 日	798 μ	664 μ
" 4 日	294	260	" 2 日	868	742
" 6 日	358	308	" 3 日	952	756
" 8 日	432	348	" 4 日	980	770
" 10 日	490	392	" 5 日	1050	782
" 12 日	532	434	" 6 日	1106	812
" 14 日	630	462	" 7 日	1148	854
" 16 日	708	540	" 8 日	1206	972
" 18 日	735	616	" 9 日	1476	1134

原殻の大きさは4ヶ体の平均値
 (他は最大個体1ヶの測定値、但し8日後は別ヶ体)

Fig 1 浮游子貝の発育

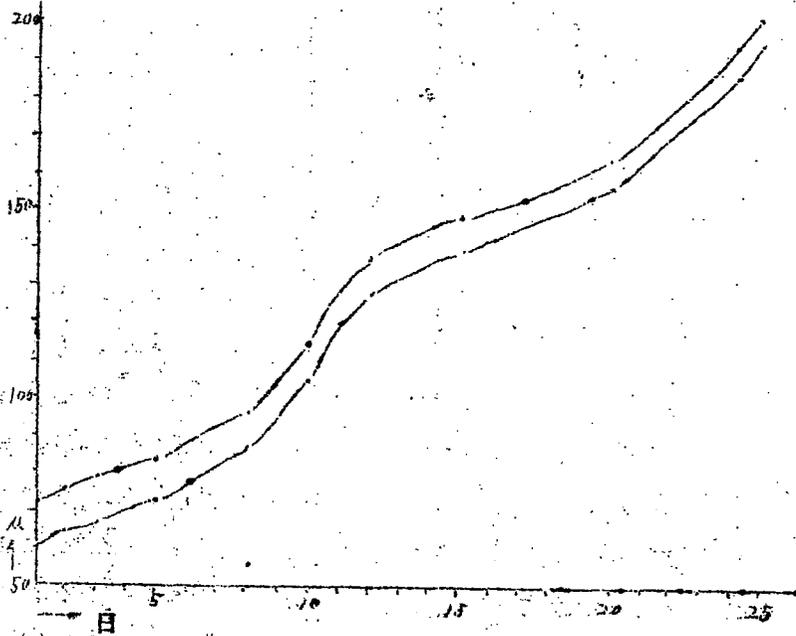


Fig 2 Spat の発育

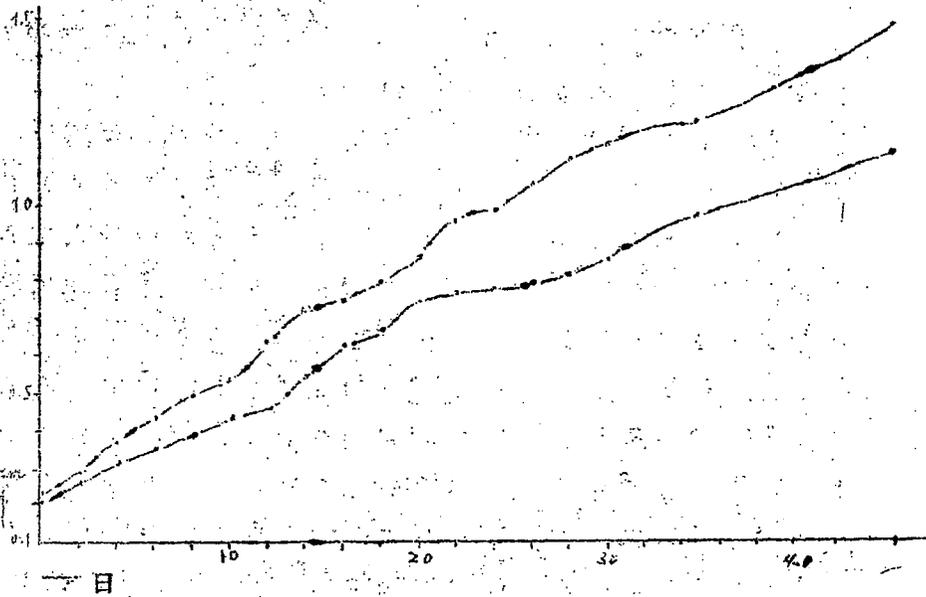
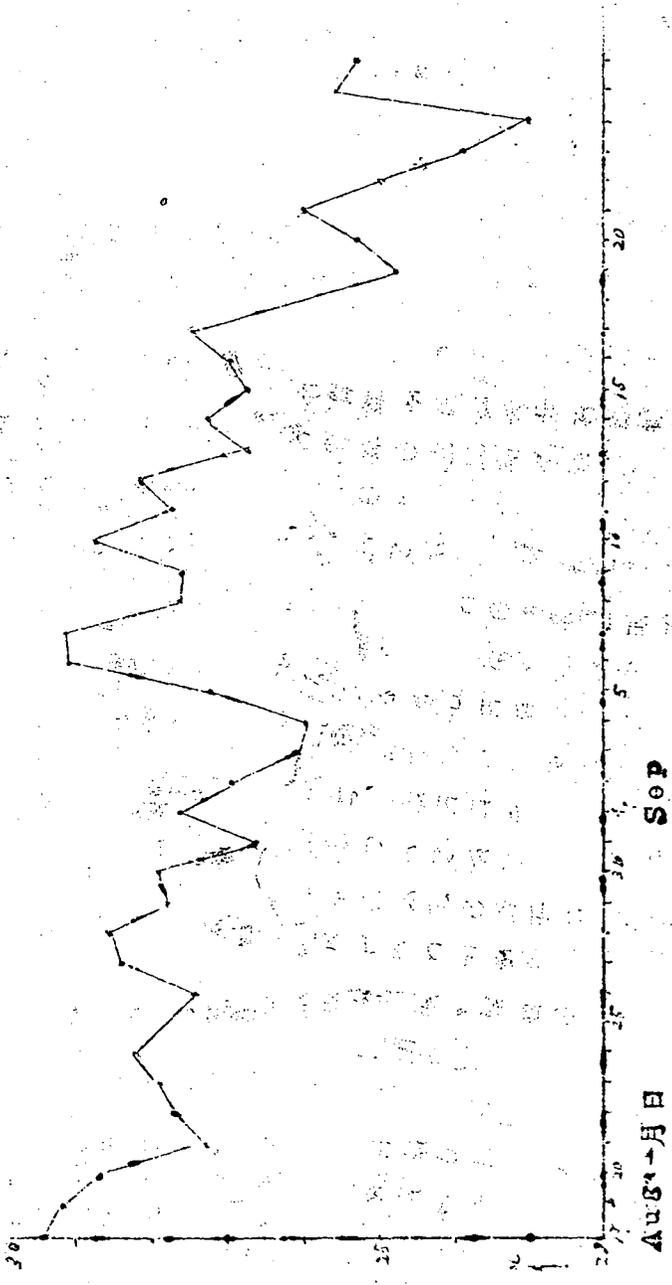


Fig 3 飼育水槽の水温経過



この間 Umbo-stage の期間がながく Full grown-stage までに長期間を要した外、この Stage の直前に大部分のものが死亡し、特に 5ℓ 容水槽のものは附着変態期に達せず附着をみたのは 10ℓ 容水槽で 6ヶ、15ℓ 容水槽では 11ヶで附着率は飼育開始時の 0.7% という低率である。

小林、結城 (1953) はタンク内の人工飼育で 17 日後に附着を開始し 3.71% の附着率をみているが、附着までに 6 日間のおくれを

生じ、そして附着率の悪いことは水槽の大小と止水状態による差異及び飼育水温の変動による生理的制約をうけたものと思われる。飼育水槽の水温変化は Fig 3 のとおり室温の影響を大きくうけて変動の大きいことは小水槽利用の場合水質

保持の調整が必要と考えられる。

附着時にやける原殻の大きさは平均殻長 21.6μ 殻高 20.6μ で前記の報告より小さく、1日 $20\sim 30\mu$ の伸長を示して附着後 2.5 日で $1mm$ 以上となり 4.5 日後には $1.5mm$ に成長した。 $1mm$ 程度に成長すると後耳部がやや鋭角となり又よく移動する。特に測定等で水中から取上げた後は激しく、強い光線、小音にも刺激を感じて鰓足を強く収縮し或は閉殻するのが観察される。移動する際は横になつて足を出し最も伸びたとき底面に吸着するようにし、腹縁部を上方にひけ体全体を半回転しねがら前進し、この運動を反覆しながら1日に 200% は移動することもある。これは天然採苗の場合、環境の変化に対し採苗器から脱落逃散することを考えさせられる。なおこの頃はまだ貝殻上の鱗片状突起の薄片は認められず貝殻も無色で $oxy\ spots$ も消失していないが、 $1.2mm$ 前後になると心臓のハク動が確認され、殻にはリヨウ柱質分泌の網目模様を観察され、 $2.5mm$ 位に成長してから殻の色素が判然とし鱗片状突起も分泌されているようになった。

太田(1958)⁽⁴⁾は杉葉採苗の稚貝の成長を附着後1ヶ月で $2.5mm\sim 10mm$ としているが、この飼育結果とは格段の差があり、正常な発育をなしていないことは相当大的な要因が作用したものと思われ、その1つとして単一餌料飼育の生理障害も考えられる。特に餌料の選択性がなく単にろ過するものであれば、数種の混合餌料を飼育水中に浮遊せしめる必要があろう。

摘 要

- (1) アンモニア海水中 (PH 8.8) で人工受精後小ガラス水槽を使用し止水状態で人工飼育を行つた。
- (2) 受精率は約 98% で以後順調な発育を示し受精後 23 日目に附着を開始して 47% の附着率であつた。
- (3) 浮游 larvae, Spat. には *Chlamydomonas* sp を飼育水 100 当り 5000 ~ 18000 ケを給餌したが成長は極めて悪い。
- (4) Spat は刺戟に対して敏感でよく移動し、天然採苗の場合では相当数の逃散が考えられる。

文 献

- (1) 小林新次郎・結城了吾：日水会誌 Vol. 17
No. 9 (1953)
- (2) 今井丈夫・畑中正吉：東北大学農学研究所報告
Vol. 1 No. 1 (1949)
- (3) 鹿水試大島分場：マベの増殖に関する基礎的研究 I、II
- (4) 太田 繁：国立真珠研究所報告 No. 1 (1956)

ブリ仔採捕試験報告

調査部 九万田一己

〔第1報〕 第1回～第4回試験経過

鹿児島湾奥魚類蕃養場で養殖予定のブリ仔採捕試験を4月から5月末にかけて7回行ったので、取あえず4回までの経過を第1報としてここに報告する。3回から7回迄の経過と総合的な考察検討は次号以下で報告する予定である。本試験の実施にあたり鹿大水産学部今井助教授、宮崎県沿岸漁業指導所茂野技師の御指導を賜ったのでここに謝意を表する。

※ 第1回

§ 期間 34年4月13日～4月20日

§ 場所 鹿児島湾口～枕崎

§ 方法

- 試験船 ちどり丸 1957 ton, 50 HP
- 根拠地 山川港
- 漁具 たも網 5 (口径4.5m 3個、3.0m 2個)
クレモナもじ網
網地 6×6、90目
- 抄網 1 (3×3 m、網地、同上)
- ⊗式曳網 1 (口径1.5 m×長3 m、
網地、同上)

○ 採集 先づ、潮目を発見すべく航行し、潮目にある流れもを採集することに努めた。流れもの大きさ、形状により適宜に、たも網、抄網、⊗式曳網を使用した。

抄網は、前縁に約3 mの竹を横に通して網を張り、左右両縁にはそれぞれ約6 mの竹を通して網を結び付け、3 mの竹の前端は、前縁に横に通した竹の両端に固定し、竹は適宜にせばめられるようにして、舷側より、流れもを抄いとつた。

⊗式曳網は、舷側に口径の約1/3が水面下にあるようにして、

滝のものがこれに入り込むよう記録した。

流れものを抄つたら、直ちに甲板上に引上げて、もを取り出し稚魚は、船上の活魚槽(59×32×40cm)に生かし、夕刻根拠地の山川港に設置してある生簀籠(85×6×8尺)に入れた。

§ 試験経過

4月13日、10h、鹿兒島発 牛根回航、生簀籠積込、18h30^m山川着

4月14日、7h、山川発 島泊、伊座敷港、現地調査するも根拠地として、船の碇泊、生簀籠設置等に不適なるため山川港を根拠とすることに決定。再び山川へ回航、生簀設置、操業、海況観測準備、宿舎手配を了え、14h40mより湾口、長崎鼻寄り海域を調査。

4月15日、7h、山川～根占～島泊～長崎鼻～開闢～山川を調査。

4月16日、7h発、山川～長崎鼻～知林～根占を調査。強風警報発令、風波たかく操業困難。

4月17日、7h発、山川～長崎鼻～根占～知林を調査。強風警報発令中、風波たかく操業困難、12h調査打切り、山川入港。

4月18日、7h発、山川～長崎鼻～開闢～枕崎を調査。

4月19日、7h発、山川～種子島間調査の予定なるも風波たかく伊座敷～佐多岬～長崎鼻一帯を調査。

4月20日、7h30m発、牛根回航～鹿兒島 15h入港。

§ 試 験 結 果

別表のとおり。

今回の調査では移動性高気圧のため、海上は風波高く（強風注意報発令）操業困難な日が多くて、万全を期せられなかつた。全般的にみて未だ流れも少く、流れもがあつてもブリ仔が少かつた。採捕されたブリ仔は40%以下のものが約85%で、時期尚早の感がしないでもない。

今回の調査で、流れもが発見され、操業した主な場所は長崎鼻周辺、伊座敷一島泊、知林島一根占の中間海域であつた。特に伊座敷沖ではかなりの流れもを発見した。ブリ仔の採捕場所についてみると、長崎鼻周辺が最も多く、次いで島泊周辺であつた。上述のとおり、伊座敷周辺では、かなりの流れもを発見した日もあつたが（4月19日）ブリ仔は極めて少なかつた。知林島一根占の中間海域では4月17日約60%のブリ1尾が抄い網で採捕されただけであつたが、このことは、ある程度の大きさに達したものが、量的に多くなれば、あるいはこの海域でも、かなりの採捕がみられるのではないかと予想されるもの、ようである。

4月18日は枕崎まで調査したが、流れもを全然発見できなかった。ブリ仔と共に採捕された他の種魚はヒメヅ、メジナ、イスズミ等で約30尾を数えた。

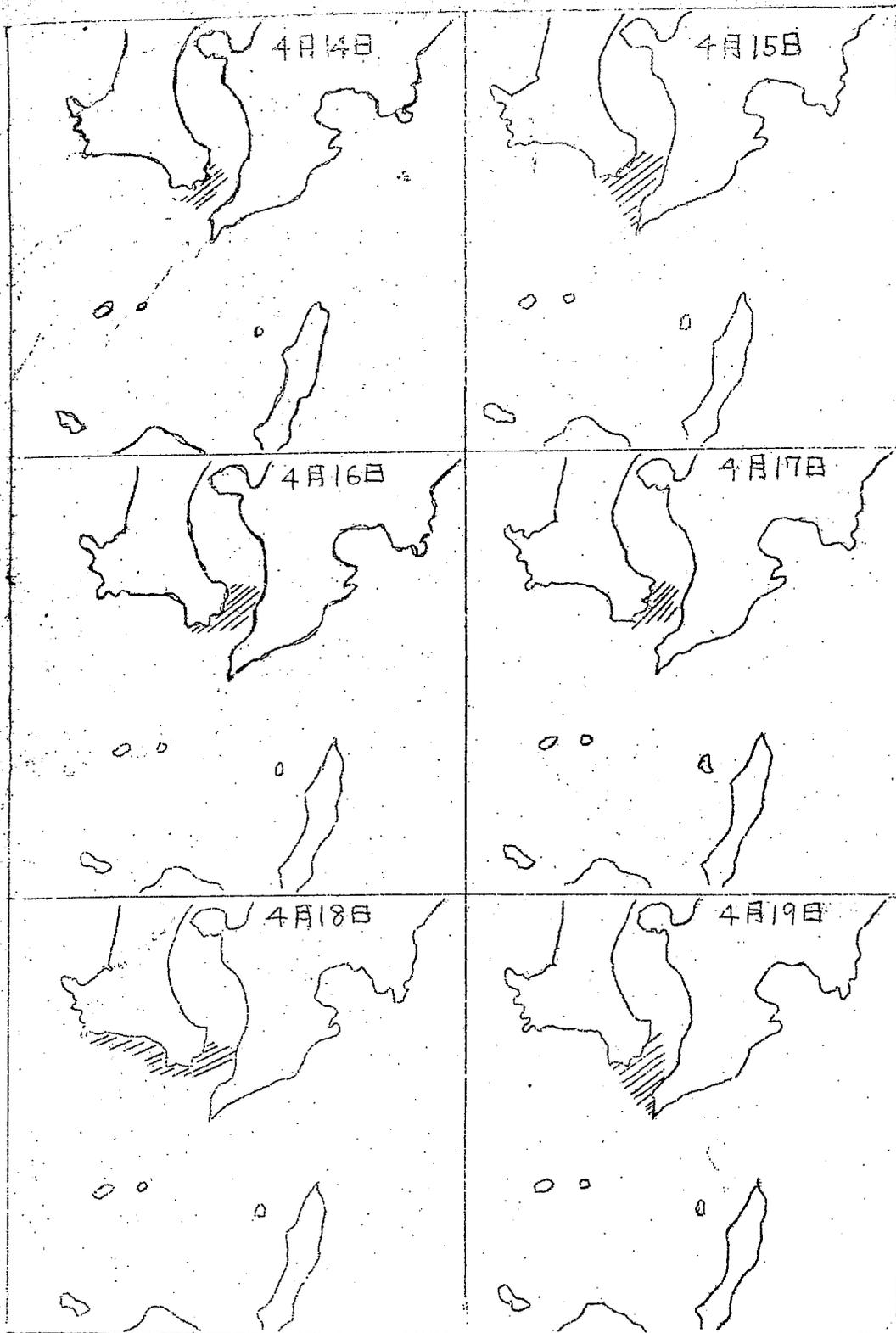
鹿児島湾口の表面水温は17.2~18.9°Cで、長崎鼻から佐多岬へかけて漸次高水温となつている。

山川港に設置の生簀籠には15日、はじめて採捕された稚魚を入れて、すぐ投餌したが、餌につかず、17日朝から餌につきはじめた。

餌は、塩アジをミンチにかけて与えた。

採捕して、牛根に回航、蓄養するまでの間に斃死したものはみられなかつたが、20日山川港から牛根へ回航の際、船上の活魚槽内で、約60%長のブリが20%のものを共喰しているのを1例だけ確認した。

月日	時間	漁具	稚魚		場所	備考
			ブリ	他		
14	15h ~1650	抄網	0	0	長崎鼻沖	
	"	夕毛網	0	0	"	
15	7-35 ~14-45	抄網	48	5	鹿児島湾口	
	"	夕毛網	72	3	"	
16	8-50	"	2	0	"	
	10-30 ~10-42	抄網	0	8	知林島沖	
17	8-15 ~11-23	夕毛網	0	7	知林~根占	
	9-55 ~11-26	抄網	1	41	"	
18					山川~枕崎	流れも発見 できず
19	8-08 ~15-08	抄網	20	51	鹿児島湾口	
	8-20 ~14-48	夕毛網	23	44		
	合計		166	157		



観察 3 回

§ 時 期 昭和 34 年 4 月 27 日 ~ 5 月 3 日

§ 根 拠 地 種子島西之表港

§ 方 法 前回どおり

§ 試験経過

4 月 27 日 8 h 40 m 鹿児島港発

17 h 30 m 西ノ表港着

28 日 時化のため西ノ表港仮泊

29 日 6 h 西ノ表出港、馬毛島周辺調査

ブリ 10、他 15

30 日 西ノ表出港、島間崎附近まで調査

ブリ 230、他 1200

5 月 1 日 西ノ表出港、種子島北東海域 ~ 馬毛島近海
~ 西ノ表

2 日 5 h 西ノ表出港、佐多岬東海域 ~ 山川

5 日 4 h 30 m 山川出港、8 h 30 m 鹿児島着

§ 試験結果

別紙一覽表のとおり

§ 調査海域の海況

調査中、1 h 毎に表面水温の観測を行った。

結果は次のとおりである。

Apr 27, 13h	18.70	Apr 29, 7h	20.30
13	18.8	8	20.0
14	20.0	9	20.2
15	20.0	10	20.2
16	20.2	11	20.2
17	20.4	12	21.0
18		13	20.8 (港内活魚 樽内)
19			

Apr 30, 9h 1990
 10 200
 11 202
 12 206 島間
 13 203
 14 202

May 1, 7h 200
 8 202
 9 204
 10 202
 11 214
 12 216
 13 212
 14 215
 15 213
 16 210

May 2, 6h 204
 7 198
 8 197
 9 197
 10 200
 11 200
 12 201
 13 193
 14 211
 15 216
 16 208

§ 流れの種類
 種子島へ島間沖
 アカモク、マメタワラ、イツ
 モク、ヤツマタモク、真正ホ
 ンダワラ類 3 spp以上
 佐多岬の東方 8~13mile
 ノコギリモク、マメタワラ、
 イツモク、真正ホンダワラ類
 7 spp (オバモク、マツマタ、マメタワラ)

馬毛島～西ノ表海域

ノコギリモク、マメタワラ、イツモク、ヤツマタモク

§ 魚体の大きさ (ブリ仔)

西ノ表、馬毛島近海 2~3cm 400尾
 佐多岬東方海域 (8~13哩) 4~10cm
 (5~6cm多し) 3700尾
 鹿兒島湾口 3~5cm 100尾

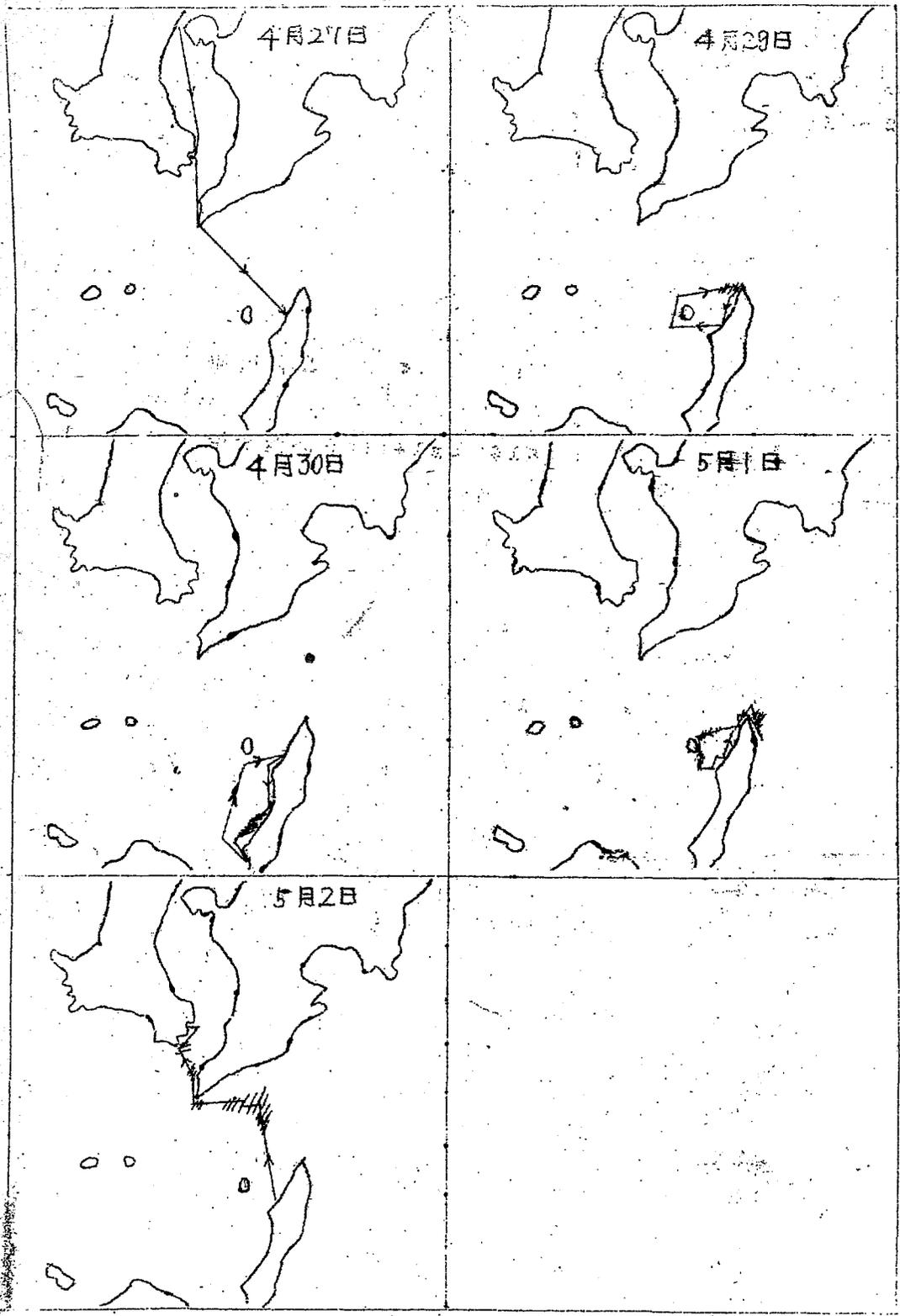
§ 斃死、逃逸

5月2日13h~3日4h30m、山川港碇泊中、斃死又

は逃逸したことを3日5h40mに確認。船内活魚槽内に遊泳していたものは6~10cm長のブリ約10尾と他の稚魚(2~3cm長)15尾のみであつた。

試験結果一覧表

月日	時間	漁具	稚魚		場所	備考
			ブリ	他		
4 29	1013 ~1105	夕毛網	10	16	種子島浦田沖	
30	645 ~1135	"	216	1214	種子島西沿岸	
	800 ~1117	抄網	15	60	"	
5 1	754 ~1006	夕毛網	832	20	種子島北部沿岸	
	1150 ~1521	"	136	238	馬毛島周辺	
	1153	抄網	5	5	"	
2	700 ~1157	夕毛網	1456	289	辺塚沖	
	720 ~1146	抄網	2257	129	"	
	1305 ~1323	夕毛網	37	2	佐多岬周辺	
	1316	抄網	8	0	"	
	1430 ~1520	夕毛網	38	10	伊座敷~山川	
	1435	抄網	26	0	"	
	合計		4236	1985		



後 第 3 回

§ 期 間 昭和34年5月8日~10日

§ 根 拠 地 種子島西ノ表港

§ 方 法 前回どおり

§ 試験経過

5月8日 9h30m 鹿兒島港出発

18h30m 西ノ表港着 途中、知林島N
3'と佐多岬NNW2'で操業。

9日 6h50m 西ノ表港発、辺塚沖操業

10h30-14h10m

24h 牛根蕃養場着

10日 8h 牛根発 10h 鹿兒島港着

§ 試験結果

別紙のとおり

§ 試験海域の水温

天候 風向力

日	時	水温	天候	風向	風力
May 8	10h	18.0	o	E	2
	11	19.6	r	E	2
	12	20.2	o	E	2
	13	19.2	r	N	2
	14	21.0	r	N	3
	15	19.8	o	SW	2
	16	22.4	o	NE	2
	17	22.4	o	NE	2
May 9	8	22.4	o	W	2
	9	22.2	o	W	2
	10	22.2	o	W	2
	11	19.4	o	W	2
	12	19.5	o	W	2
	13	19.5	o	W	2
	14	19.6	o	W	2

15	198	0	W	2
16	205	0	W	2
17	205	0	W	2

§ 流れもの種類と組成

May 8, 知林島 NW 3		May 8, 佐多岬 NNW 2	
種類	組成	種類	組成
イソモク	47%	ヤツマタモク	39%
ヤツマタモク	26	ノコギリモク	24
ウミトラノオ	8	マメタワラ	13
マメタワラ	8	イソモク	8
ヒシキ	3	真正ホンダワラ類	6
真正ホンダワラ類	1	ヨレモク	3

May 9, 辺縁沖			
種類	組成	種類	組成
ヤツマタモク	68%	オオバモク	1
ノコギリモク	12	ホンダワラ	1
真正ホンダワラ類	10	アカモク	1
シダモク	2	ウミトラノオ	1
イソモク	2	マメタワラ	0
ヒシキ	2		

§ 魚体の大きさ

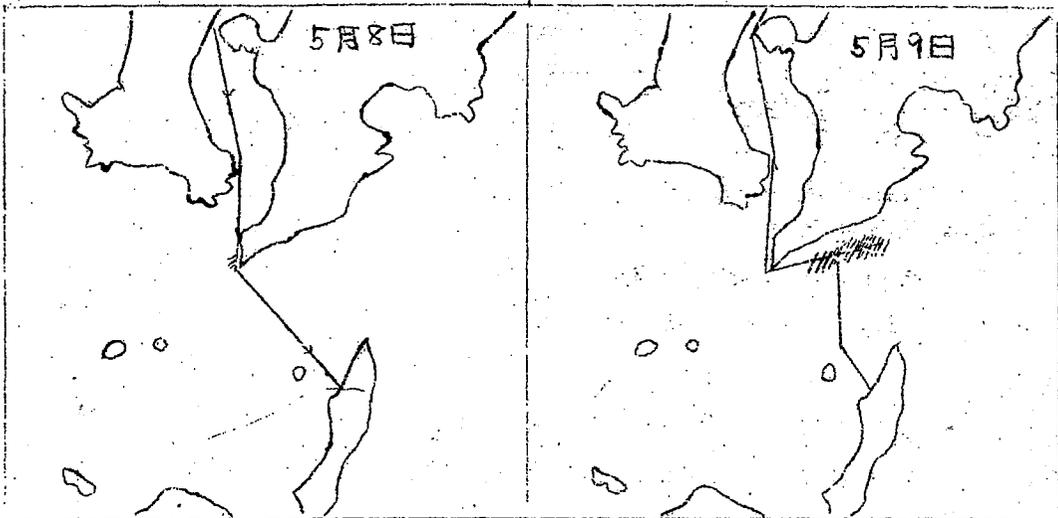
佐多岬 NNW 2 で採捕の魚体

FL. mm	%	平均体重
~15	10	0.225 gr
16~20	20	
21~25	30	
26~30	20	
31~35	20	

調査結果一覽表

月日	時間	漁具	種魚		場所	備考
			ブリ	他		
5 8	1123 ~1133	タモ網	22	7	知林島北3'	
	1451 ~ 54	"	40	5	佐多岬周辺	
	1455	抄網	70	0	"	
9	1033 ~1410	タモ網	1858	46	辺塚沖	
	1040 ~1410	抄網	3509	27	"	
	合計		5499	65		

航跡・操業地点図



系 集 4 回

§ 期 間 昭和34年5月11日~14日

§ 観 測 地 山 川 港

§ 方 法 前 回 と 同 じ

§ 試 験 経 過

5月11日 9h30m 鹿野島港発、知林島NNW6'で

13h00~14h30m 操業。

17h 山川港着。昼時々雨。風向力SE4

12日 時化のため山川避泊。雨。風向力:S4

13日 7h 山川港発。11h45m~17h05

m 辺原沖にて操業。

14日 8h 養場着。網入れかえをなす。

§ 試 験 結 果

別紙のとおり

§ 調 査 海 域 の 海 況

調査中、1hr 毎に表面水温の観測を行つた。

Apr 13	7h 山川港外	19.9°C	12h	19.6
	8	21.0	13	19.6
	9	21.4	14	19.9
	10	19.3	15	19.9
	11	21.6	16	19.8
			17	19.8

§ 魚 群 の 大 き さ

11日探捕分 (知林島NNW6') 13日探捕分

FL (mm)

BW (gr)

FL (mm)

BW (gr)

Max

33

Max

126

3657

Min

17

Min

10

0.65gr以下

Ave

23.33

0.1233gr

Ave

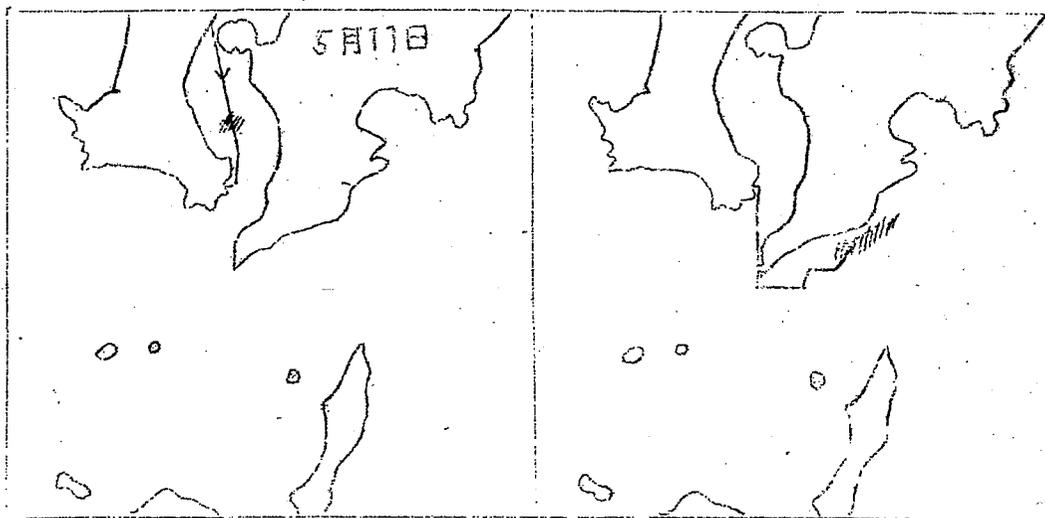
51.64

0.65gr

調査結果一覽表

月日	時間	漁具	種 魚		場 所	備 考
			アサ	他		
511	1200 ~1430	夕毛網	2267		知林島 NW 6'	
513	1145 ~1200	"	4203	20	辺塚沖	
	1155 ~1205	抄網	4693	3	"	
	合 計		11363	23		

航跡・採集地点図



- 曾って内地勤務の頃谷山に出張した折垣根からドギツイまでに赤い花がブラ下るようにして咲いていた。
「あれが仏草花ですよ」と教えてもらつたことがある。
態々教えてくれる処をみると余程珍しい花なのであろう。
その名からして仏教と何か関係のある有難い花なのかも知れないと思つた。
大島に赴任してトタン葺の吾が家の垣根に有難い筈のこの花が無数に咲きほこるのに驚いた。さばば大島の垣根は大抵この仏草花か、つげの木で周らされているのだという。
大火以来古仁屋の街に樹木はみられなくなつた。新築した家に移殖した仏草花も今は色褪せ枯れているようである。
- 大島に来ると年令とは別に大なり小なり盆栽の趣味を持つようになる。
転勤ともなれば各自幾鉢かを大事そうに持つて乗船してゆく。そして幾月かが経ち蘇鉄が新しい芽を出したとか、浜つげが白い実を持つたという便りが届くとホツトするのである。「又も内地に持つていかれた」と機橋で冗談ともつかず つぶやいた 大島の人の言葉も忘れられない。
- X月X日 午後 本場勤務から帰つたK技師が盛んに計算機を廻している。漁業と単位漁獲量を統計学的に究明するのだそうである。統計学的な基礎が必要とあつてS技師が「推測統計法」という入門書を机の上に置き 巻煙草ならぬ きざみを吸っている。
それを S係のIが暑そうに眺めている。事務室はトタン葺 室内は毎日32以上を記録している。タマラないとI技師が飛出して ホースでトタン屋根に放水を始めた。却つて暑くなつたというK技師に いや気化熱で涼しくなる筈だと I技師 ズボン水びたしのまゝ 団扇を使つている。

一向に暑さは変わらないようである。

せめて窓を開け放して夜休めたちと纏つかれぬ夜の暑苦しさを、日技師が訴える。

窃盗位なんでもないが、ハブに入られるのがこわいのである。暑さ位、我慢しなければならぬようにとよく出来ている。

(7. 15 T. I 記)

東海サバ漁況 (6月分)

東海サバはね釣漁業も6月で終漁となつた。

6月鹿児島港入港船は71隻、総水揚量は1376.7トン、1航海平均は1.9トン、これを昨年同期に比較すれば入港船総水揚量、1航海平均共ヤ、上まわっている。

漁場は上旬、中旬は5月下旬よりの漁場533、535、515の各漁区に集中操業をなしたが、中旬以降北上し、 $N 29^{\circ} 20' \sim 50'$ 、 $E 124^{\circ} 10' \sim 50'$ の461、462、472区のクチミノセ附近に移動して終漁となつた。

漁場の移動を昨年と比較すれば大差はないが、ヤ、西寄りの漁区が好漁をなしている。

これらの漁場は、大型揚繰網と同漁場であり、はね釣船としては終漁期の魚群の稀薄とマワリサバが多いのと相まつて漁獲量の低下を来たしている。魚群の反応水深は10~20mと浮上群を目的としているが、朝夕、マヅメを除いては餌付は全く不良である。魚体は、FL 295~355mmでモードは310~330mmに見られる。中サバが大部分である。漁場水温は、上旬中旬の535、515区では22.5°C~23.4を示していたが、下旬では24.5~25.5と上昇しており昨年同期と比較すれば低目である。

一方県内の小型船（10～20トン）は宇治群島、佐多岬沖、屋久島、種子島のいわゆる 薩南海区漁場で天秤釣にて1日 375～750kg程度の漁であり、大サバを対象として操業している。

6月鹿兒島港調査 (東海サバのみ)

旬別	入港船数	水揚量	1船海平均
		Kg	Kg
上旬	38 (23)	350837 (318153)	22398 (13830)
中旬	25 (26)	439075 (345528)	17565 (13286)
下旬	8 (10)	86805 (181537)	10850 (18153)
total	71 (59)	1376777 (845216)	19391 (14385)

各 部 日 記

○ 製 造 部 日 記

- 6月16日 うしお煮製造試験
- 6月18日 "
- 6月22日 魚肉ハム製造試験
- 6月23日 夏季うしおソーセイジ製造試験
- 6月24日 "
- 6月26日 "
- 7月 1日～7月 6日
中型あじみりん干製造試験
- 7月 8日 とび魚特殊加工試験

○ 養 殖 部 日 記

- 6月26日 山崎真珠（西岡氏）
養殖圃地は間金養殖場

6月27日 くらちよう貝受養実験開始
 7月10日 くらちよう半円真珠核入準備
 7月15日 はなやなぎ資源調査 (西之表)
 7月20日 鹿児島県真珠養殖振興協議会
 (於 会議室)

○ 漁業部日記

7月 6日 ちどり丸上架 (郡元造船所)
 7月 7日 照南丸定期検査の為山川へ廻航
 7月15日 農林省水産講習所学生黒潮丸にて寄港
 来場
 7月18日 中村南水研所長「マグロ漁業」
 講演受講
 7月20日 飛魚会議 上野部長出席

調査部日記

6月22日 サバ体油酸化率定量
 6月24日 ソーセイシ保護試験
 6月27日～30日
 プリ仔採捕試験
 7月 1日 飛魚体油抽出
 7月 2日～ 3日
 プリ生育調査 (蕃養場)
 7月 6日～11日
 蕃養場環境調査

○ 分場日記

6月19日 マベ増殖予備実験 モナス培養開始
 6月23日～24日
 粒うに再加工試験 小瓶134本
 中瓶95本生産
 6月26日 マベ生産率調査

- 6月27日 大和池からいせえび熟度調査依頼による測定
- 6月28日 梅雨去り本格的な夏に入る
- 7月1日 密漁船(爆発物使用)漁獲物鑑定
テトラピア移殖(瀬戸内町久慈)
備品検査実施
- 7月2日 テトラピア稚仔(9~10尾)140尾
親魚池から移す
- 7月3日 クロチヨウガイによる人工受精予備実験
- 7月6日~9日 探礁丸上架
- 7月9日 ハナヤナギ検鏡調査(嚢果の形成を発見)
- 7月10日 マベ生殖巣調査(かなり成熟発達す)
- 7月11日 アイ良郡農協長一行15名分場見学
- 7月16日 マベ人工増殖実験開示

編 集 後 記

③ 大気がびたりと静止すると、^途突端に肌に汗を生ずる。カノ発生を根絶しようとしなくて三間四方のカヤなる暖房地帯に逃避する生活感覚 東洋的順応の所産物という勿れ。我々の 研究調査にもこれと類似せるものがありはせぬか。

④ 分場を失つて真の意味での漁村直結の水道管は切断された今日 本県水産界にも改良普及員制度が施行される。本県に 名。「焼石に水だよ」という声もあるが今後の増員と制度の充実に期待する。

⑤ 漁村問題は積立式の統計資料のみでは解決出来ぬ。地についた漁村感覚との交感操作場があつてこそ情報統計の適格な把握が得られ生きた漁村サービスも期せられるというものだ。
暑中御見舞申上候。